

中央設計技術研究所

代表取締役社長 西原 秀幸氏



上下水道界の課題
認識を踏まえた思
い

上下水道界が抱える現
状を踏まえた自らの立ち
位置については「まず
は能登です」と表情を引
き締める。

「当社は本社がここ石
川県金沢市にある以上、
能登の復興に向けて全力

を尽くす所存です。当
然、上下水道分野の復旧・
復興が主になります」と
意欲を示す。そして、そ
の行動方針を踏まえた課
題認識を口にする。

「能登半島の各事業体
では、震災前から広域化
に向けた課題があったも
の、中々前進していま
せんでした。そのネック
の一つが管路台帳の有
で震災が発生し、それが

精通している者が駆けつ
きました。当社は管路台
帳の実状を把握している
上に、既存データもある
程度保有していたので、
当社が開発導入した管路
台帳システムから図面出
力し、応援関係事業体に
提供しました。併せて、
国交省からの要請に従
う、当社を会場に復旧復
興に関するコンサルタン
トが一堂に会して会議を
しています」

能登の教訓により上下
水道の強靱化を目指す。
2025年を
振り返って

昨年を振り返っての所
感については「持続」を
見据えて議論を展開。
「官民連携に関して
は、DBやウオーターP
P等への積極性を高め
ることは不可避の情勢で
す。コンサルタントはそ
れぞれ切磋琢磨して貢献
しなければなりません
が、場合によっては人材
不足も考慮してコンサル
ト同士で連携した民民連
携も視野に入れるべきと考
えています。あとは、水
道料金、下水道使用料の
値上げの必要性が喧伝さ
れていますが、そもそも
多くの自治体では受益者
の絶対数が減っている現
実があります。行政には

地域を挙げて人とお金が
集まる姿勢、工夫が求め
られます。何十年先のス
パンで人が集まる、帰っ
て来るビジョンが必要で
すし、そのためには、水
道、下水道バラバラでは
なく、上下一体、さらに
は都市計画とも連動した
地域創生を図るべきで
す」

「官民連携はもとより、
民民連携、さらには分野
を超えた連携の意義を強
調する。

今後の事業戦略
の方向性

まず、組織体制の強化
へ年頭から拠点を整備。
「1月1日付で名古屋
市内に中部支社を発足さ
せました。当社は中部圏
に本社本店のあるコンサ
ルタントの中で売上高ラ
ンキングは水道が1位、
工事業をそれぞれの業務

まずは能登の復興に尽力 「持続」へ多様な連携主導

「能登地方の上下水道
の復旧・復興は勿論のこ
ろ、官民連携の新たなあ
り方も志向して、幅広い
視野での連携により、他
のコンサルタントにはな
いアセットマネジメント
を提案したいと考えてい
ます」

その方向性に合致する
実績は枚挙に暇がない。
「長岡市との共同で開
発した水管橋の点検維持
管理システムは補修等の
適切なタイミングのシ
ミュレーションを可能に
するものですが、これは
和歌山市の水管橋崩落事
故の教訓を踏まえて検討
したものです。あるい
は、岐阜市と奈良市で導
入中である給配水オンラ
インシステムは事業体と
とゴルフで交流です」。

アタになりました。やは
り、経営の効率化の検討
を経営の効率化の検討
だけを実現するのは難し
いという課題が浮き彫り
になった格好です」

改めて一昨年の地震発
生直後の対応を振り返っ
ていた。

「1月2日に対策本部
を立ち上げて、すぐに社
員を現場に急行させまし
た。当然、当地の実状に
も含めて復興が長引いて

を効率化できます。さら
には、データ駆動型クラ
ウド管理システムの開発
を豊田市と共同で進めて
います。維持管理の効率
化に向けたシステム構築
に意欲的な豊田市の先進
的な考え方に当社も応え
たものです。施設管理・
運用における判断をAI
が担うもので、事業体と
コンサルタントがそれぞ
れに蓄積した知恵のドッ
キングを目指していま
す」

最後に、石川県の企業
としての矜持を口にす
る。

「金沢の会社ですが、
全国の上下水道に貢献
し、その代価を石川県に
還元することも地方で
育った当社の役割と思っ
て全国を駆け巡っていま
す」

「金沢の会社ですが、
全国の上下水道に貢献
し、その代価を石川県に
還元することも地方で
育った当社の役割と思っ
て全国を駆け巡っていま
す」

～コンサルタント、メーカーからの問題提起により展望～

に、資産の劣化状況を数値化し、最適な更新時期を測ることで、コスト削減と資産管理の最大効果を両立するほか、資産を固定化するリスクを可視化し、優先順位付けを設定することで効率的なリスク管理の実現が可能となります。また、資産に関する情報の一元管理により情報検索や報告書作成などの業務の効率化を図れる。さらに、デ

ラ「事後保全」的な対応から所感をお話し頂けますか？

加藤：物理学者で、随筆家である田中重雄（たなか しげひさ）氏は『天災は忘れた頃にやってくる』があり、最近の天災は忘れた頃にやってくる。が、中小の事業体の対外的には事後的な対応を広域的に進める

被災状況に応じて効率的な応急復旧を構築レベルのパッケージが有効

